

孫に語る歴史

第6章 近世前期

谷川 修

第6章 近世前期

6.1 ヨーロッパの変容、西アジアとインド亜大陸

A. ヨーロッパの変容

シェイクスピアの『ヴェニスの商人』のことを聞いたことがあるだろう。友人である商人が、主人公のためにお金を借りてくれる。恨みを抱いていた高利貸は、商人の船が難破して払えなくなったら、商人の肉 1 ポンドを取るという条件をつける…。この劇は 1600 年頃のイングランドで上演されたのだけれど、舞台は地中海交易で栄えたイタリアのヴェネツィア(英語名ヴェニス)である。じつは、そこではすでに 1300 年代後半に、難破する危険のある貿易船に対して保険のしくみがつくられていた。

ルネサンス

地中海のイタリア北部から内陸部を通して北海沿岸に至る、広い交易による経済の発展が、ヨーロッパに近世をもたらした。近世は、まずイタリアで始まった。その最初の表われが、前章であげたダンテやボッカチオの作品だ。北の中心地ネーデルラント(オランダ・ベルギーなど)が、イタリアのあとを追った。都市が発展し、封建的な制約から自由になった個人が、さまざまな方面に人間性を開拓し始める。ギリシア・ローマの古典文化を復興しようとする気運がおこり、文化運動としてヨーロッパを

おおっていく。ルネサンス(再生)と呼ばれている。人間の知性が、カトリック教会の束縛をつきやぶり、現世の人間を肯定する人文主義(ヒューマニズム)になった。

ルネサンスは、ヨーロッパ経済の発展に支えられて進展する。ネーデルラントでは、ファン・アイク兄弟が油絵の技法を改良した。経済の成果は、北部イタリアの諸都市のはなやかな建築物になって現われ、それを飾る絵や彫刻が新しい潮流を生みだす。ローマのサン・ピエトロ聖堂は、ルネサンス建築の代表である(パリのノートルダム寺院などのゴシック建築とくらべると、違いが分かる)。フィレンツェやローマに、名だたる絵や彫刻が残されている。君たちはそれらを写真か何かで見るだろう。レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」や「最後の晚餐(ばんさん)」のことは知っているね。ラファエロの「聖母子像」のような柔和な絵が好きかな。ミケランジェロは、絵もすばらしいけれど彫刻はもっとすごいね。「ダビデ像」が大理石から彫り出されたと聞くと、ただ感嘆するほかない。名を忘れられる職人を抜け出て、芸術家が登場するようになった。おじいさんが芸術にくわしければ、ここにもっと多くの芸術家の名をあげるべきなのだろう。

レオナルドは多才な人で、人体を解剖学的に知ろうとしたし、広く科学に関心を示した。人間と事物をよく観察し、思索を深める人々が登場するようになったのだ。人文主義の知識人は文学的な作品を書いた。エラスムスの『痴愚神礼賛』、トマス・モアの『ユートピア』、ラ

ブレーの『ガルガンチュア物語』など、今も読まれている。国々が激しい抗争をしていたイタリアで、マキャヴェリと言う人が、それを冷めた目で観察して『君主論』という書物に書いた。彼は権謀術数(けんぼうじゅっすう)の代表者とされているけれど、進歩したと思っている現代の外交がそれから遠いと言えるだろうか。書物を読むとき居ずまいを正すような時代の人だった。

1500年代半ばを過ぎると、時代が進んで人間の考えが深まったように見える。おじいさんの尊敬するモンテーニュは、随想録『エッセー』で人間にまつわるさまざまなことを思索した。ぜひ読んでほしい。小説『ドン・キホーテ』を書いたセルバンテスや、『ハムレット』など多くの戯曲を書いたシェイクスピアもこの頃の人だ。作品の味わいが深くなったと思う。

科学の分野でも進展があった。1500年代になって、ポーランドのコペルニクスが地動説を唱えた。地球が動いているという考えは、古代ギリシアにもあったようだ。ところが、太陽・月・惑星・星の運動を、地球を中心に説明する方法があみだされて、天球の運動という考えが支配的だったのだ。イタリアの修道士ブルーノは、彼の哲学で、天球という考えを去り無限に広がる宇宙を考えた。しかし多数派は、彼を異端として火あぶりにする。デンマーク人ティコ・ブラーエは、精密に天体を観測してデータを記録しつつあった。チェコのプラハに移住し

た彼のところへ、ドイツ人ケプラーが来た。ケプラーは、ティコの死後その観測データを研究して、1600 年代初め、「惑星は太陽のまわりの楕円軌道を回っている」という事実を発見した。そのデータは、観測器が進歩していたとはいえ、肉眼で観測して得られたのだよ。

地動説を正しいとしたイタリアのガリレオ・ガリレイは、望遠鏡で天体を観測した。彼は宗教裁判にかけられ、むりやり地動説を取り下げさせられた。ローマ教会がその誤りを認めたのは、20 世紀の終わりのことだ。ガリレイは力学を研究して、加速度という考えに至り、慣性の法則を発見する。地球が動いても、地球が動いていないかのようにわたしたちが運動できる理由を説明してみせた。彼は、意識的に実験を工夫することの大切さに気づき、観測結果を数学的に表現する方法を開拓して、近代科学を開始した。科学者たちの出身地を言ったのは、ヨーロッパ各地の人がその営みに参加したこと、全体として一つの文明圏として発展したことを示すためだ。

中国の発明した活字・火薬・羅針盤がヨーロッパに伝わった。1400 年代中頃、グーテンベルクが実用的な活版印刷機をつくると、またたく間にヨーロッパに普及して、文明は印刷物という翼を得て飛躍する。火薬と大砲や火縄銃が使われ出した。技術的に進んだ火器と羅針盤が、大型化した貿易船に装備されて、海外進出をうながす。

ヨーロッパの大航海時代

1400 年代、北部イタリアの貿易船は、西アジアへと向

かっていた。イベリア半島を征服してできた新しい国、ポルトガルとイスパニア(スペイン)は大西洋に向かう。

ポルトガルは、アフリカの西海岸を南に下がって行き、大西洋上の島々を探検して領土にする。1480年代に赤道へ、さらにアフリカ南端の喜望峰にまで到達した。この進出は、拠点になる場所を自国のものにすることだし、金などの高価な物を獲得するためである。

1492年、スペインが陥落させたばかりのグラナダで、イタリアのジェノバ出身の人物が女王に面会を求めた。コロンブスというその男は、大西洋を西に進んで、インドに行ければ、大きな利益が上がるだろうと考えたのだ。100人ぐらい乗った3隻の船は、2か月あまりの航海の末、“西インド諸島”に着いた。スペインは、ローマ教皇から、大西洋の西に領土を獲得する“許可”を得る。すぐに、西インド諸島よりも巨大な大陸があることが分かった。その大陸は無人の新大陸などではない。

ベーリング地峡を通してアメリカに広がった人々の子孫は、国々をほろぼされ、略奪を受け、金銀の発掘などの労働に使われた。外来の者たちは、社会が急激に破壊されるのを氣にとめず、先住の人々の数は急速に減少した。同行したキリスト教の司祭たちは、その社会の衰退をどのように見ていたのだろうか。アメリカ大陸先住民の人口の減少は、そこになかった病原菌をヨーロッパ人がもちこんだことも一因らしい。逆に、ユーラシア大陸の人々は、それまでなかった有用な農作物を手に入れることができた。

ローマ教皇の承認の下、スペインとポルトガルは海外諸国を山分けしようとする。スペインが大西洋を西に向かい、ポルトガルは東のインド洋に出る、という協定だ。1498年、ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマは、アフリカ東海岸のモザンビーク、さらにインドの西海岸に到達する。ヨーロッパ人は、香辛料を直接手に入れることができるようになった。そこは、西アジアのイスラーム商人たちの交易圏だった。

1500年代、ポルトガルはインド洋の制海権をにぎる。アフリカ・ペルシア湾入り口・インド・スリランカ・マラッカ海峡・インドネシア諸島に、拠点の要塞都市を築いて、海上貿易の最初の覇者となる。中国のマカオにも居住地を得た。こういうわけで、日本に最初に来たヨーロッパ人はポルトガル人なのだ。ポルトガル人はブラジルにも至る。金銀が見つからず、砂糖キビを生産する大農場経営型の植民地を始めた。現地住民を奴隷として使い、アフリカの人々も奴隷として買い入れ、強制労働をさせるようになる。

アメリカ大陸のスペインの縄張りでは、火縄銃も馬もないアステカ王国とインカ帝国が、野心家のひきいる少数のスペイン人によってほろぼされた。彼らは、金や銀を奪って利益をあげようとした。さらにスペインは、東でのポルトガルの活動に対抗して、アメリカ大陸の西へ出ていく。大西洋から太平洋に出たマゼランの船は、彼がフィリピンで現地人に殺されたあとも、航海を続けてスペインにもどり世界を一周した。やがてフィリピンは

スペイン領になる。その名は、のちに国王になる皇太子フェリペの名からとられたのだ。1500年代中頃、南米ポトシに大きな銀山が発見される。大量の銀がヨーロッパに運ばれ、一部は太平洋を渡ってフィリピンのマニラに運ばれ、中国へ流れた。

ほかのヨーロッパ諸国は、だまって見ていたのではない。フランス・オランダ・イングランド(イギリス)が割って入る。君たちは海賊の物語がおもしろいかな。1500年代後半、遅れて海外進出を始めた国々、とくにイギリスなどは、スペインとポルトガルの船をおそって品物を奪った。カリブ海が舞台のことが多いけれど、スペインの運搬船から略奪するのが実入りの大きい仕事だったのだ。オランダ・イギリス・フランスは、カリブ海の島々や大陸沿岸部に植民地を獲得していく。北アメリカの東海岸にも植民地をつくり始めた。アメリカの国々がどこから独立したかを調べたら、ヨーロッパ諸国が先住民の土地を奪っていった歴史をたどることができる。

1600年頃から、新興国オランダが積極的に海外進出に乗り出す。1602年、東インド会社がつくられた。条約をむすび、軍隊で戦い、植民地を経営するなど、海外で大きな権限をふるうことを認められていた。ポルトガルの得ていたマラッカ・インドの都市・スリランカなどの拠点を奪っていく。ジャワ島(インドネシア)のジャカルタを拠点として、東南アジアの交易で主導権をにぎった。台湾も占領した。オランダ人が日本に来たのは、こういう

情勢の中のことである。

あとを追う新興国イギリスが東アジアまで来る。イギリスの東インド会社が設立されたのは 1600 年のこと。インドネシアでオランダと争いがあったのち、イギリスは、東南アジアよりもインドに力をそそぎ始める。その時期に日本の平戸から去っている。アジアで、オランダとイギリスは、別々の重点地域に関心をもつようになる。

1600 年代の大航海は、中継貿易が主体で、それぞれの地域で手に入りにくい品物を別の地域から運んで利益を得た。ヨーロッパの海外侵略はまだ本格的なものではない。アジアでは、強い支配体制のできていなかった地方が植民地化された。日本や中国は、「鎖国」と呼ばれる限定された海外貿易をしていればよかった。

資本を増殖するシステムの開始

昔物語の大金持ちは財宝を蓄えている。いっぽう商人は、遠く離れた土地のあいだで貴重な品物を交換して利益を上げる。それは商品を流通させ、貨幣経済をおし進める。貨幣が流通するようになると、財宝を蓄える意味はうすれ、お金をどれだけ手に入れるかが問題となる。お金の増えることが人間の欲望になる。もちろん、お金をただ持っていても増えない。お金ではたおり機や商船を買い、毛織物業や商業を営んで利益を上げるのである。事業につぎこむお金や設備などを、資本と呼ぶのだ。資本主義というけれど、何かを主張する考え方ではない。

資本制社会とは、人がお金(資本)を投じてそれを増やそうとし、あたかもお金(資本)自身が増えようとしているかのように見える、そういう社会のことをいう。そこで経済活動といえば、お金を増やす活動のことだ。東アジアの経済という言葉は、「経世済民」という考え方から来ていて、社会を運営して民を救済するという理念を含む。しかし今、それを思い出す人がいるだろうか。

1500年までのヨーロッパは、イタリア北部を中心に北ヨーロッパに広がる経済圏としてあったが、大航海時代になって地球をめぐる交易の環につながった。1500年代半ばを過ぎると、ヨーロッパの船が直接海外からもたらす物品が大量に流れこむようになる。とくにスペインの運ぶ銀が、ヨーロッパ経済に大きな刺激を与えた。銀の価格と商品の価格のバランスがくずれ、物価が上昇する。この動きが波紋を広げ、お金＝資本の増殖を助けるように働いて、資本主義経済が立ち上がる。

発展する経済活動は、いつしかヨーロッパ経済の重心を移動させる。1600年代初期、経済の重心は、イタリア北部からネーデルラント(オランダはその一部)を中心とする北西ヨーロッパに移った。単純化して言えば、お金がネーデルラントの方へ流れるようになった。それまでのどの社会よりも、資本の動きがあらわな時代が始まった。資本を増やす市民が、土地から農産物収入を得る封建領主に対抗できるようになっていく。

現代の社会学者 I. ウォーラースティンが、世界を、中心・半周辺・周辺という地域差のあるシステムの動きと見る見方を提唱している。その見方によれば、1600 年代、オランダに資本主義的な経済の中心が生まれて、世界システムの動きを先導するようになった。それが、1600 年代に入って、オランダを急速に海外へ進出させるようにしたのだ。経済活動は、地中海から大西洋沿岸に広がり、西ヨーロッパをまきこむ。さらに、北海からバルト海の奥まで及び、バルト海の国々が半周辺国としてその動きに加わる。ロシアまで刺激する。世界につながっている大きな規模の経済活動が、資本の増殖を進め、ヨーロッパを発展させていく。

ヨーロッパの宗教改革

1500 年代になると、ヨーロッパ世界の全般的な進歩が、宗教のしきたりを批判的に見る眼を生んでいた。人間の罪という考えはキリスト教のキー・ワードだけれど、教会がその罪のゆるしを贖宥(しょくゆう)状に書いて与える慣習ができていた。1517 年、贖宥状がたくさん“販売”されていたドイツで、神学教授の修道士ルターが、95 の論題を発表し、信仰こそが大事だと説いた。カトリック教会内で論争になり、異端審問にかけられたルターは、ついにローマ教皇の至上権を否定し、カトリック教会の組織と対立するようになる。それは宗教改革という大きな運動に発展し、ヨーロッパ社会が変化していく。

ルターの考えは、印刷されてドイツ人のあいだに知ら

れていった。神聖ローマ皇帝(カール 5 世)はカトリック側だが、フランスとの戦争に忙しく、ドイツの政治情勢も複雑である。北部の領主で、ルターを応援する者が出た。新教(プロテスタント)は聖職者を取りこんで、領主や民衆のあいだに広がっていった。ルターはドイツ語訳『聖書』を出し、民衆も読めるようになる。結婚し、日本の親鸞のように、聖職者が妻帯するという前例をつくる。

ドイツの封建社会は、農村に家内手工業が現われるなど、経済の発展によって変質しつつあった。力を増した領民に対し、封建領主はその権益を守ろうとする。宗教改革の運動の中で、大きな農民一揆(いっき)が広がった。一揆はルターたち聖職指導者を保守的にし、鎮圧されると、領主が新教をとるかどうかが事態の進み方を決めるようになった。新教を受け入れた領邦国家で、カトリック組織から脱した教会ができる。1555 年、多くの国々の連合体である神聖ローマ帝国の議会が、アウグスブルクで開かれ、ルター派の新教を容認した。ドイツの北部は主に新教となり、南部は旧教にとどまった。

スイスではツヴィングリという人が、新教にもとづく政治を指導し、カトリック側の州との戦争で死んでいる。フランスで宗教改革運動に参加したカルヴァンは、弾圧されて亡命した。その著書『キリスト教要綱』が、新教の神学として大きな影響を及ぼす。スイスのジュネーブに行き、新教徒による政治を指導した。その流れをくむ新教が、フランスやネーデルラントに、さらにイングラ

ンドにも広まった。新教の自己を慎む生活態度が、資本の最初の蓄積を助けた、と 20 世紀の社会学者 M. ヴェーバーが論じている。

新教の広がりを見て、1530 年代に、カトリック教会を改革しようとする聖職者たちも現われる。イベリア半島出身で熱心なカトリック支持者だったロヨラやザビエルたちは、イエズス会という修道会を結成した。結束の強い会に発展し、海外にも出て積極的な布教活動をおこなった。以前からある修道会も加わって、教育・研究の活動が活発になり、文化的に重要な役割をはたした。

今、イタリアやイベリア半島にあるのはカトリック教会だ。フランスでは宗教対立が政治的な戦争になったが、戦争が静まると新教も許されることになった。血を流すような争いを経験してやっと、宗教と政治を分離する考え方にたどりついたのだ。その後の経過で、フランスでは大多数がカトリック教会である。ドイツ・スイス・オランダには新旧の教徒が同じぐらいいる。ドイツの北にあるスカンディナヴィア諸国は、王の主導の下でルター派の新教になった。ブリテン島では、世俗的な事情からできた新教の国教会が多い。

ヨーロッパの政治動向

1500 年代前半、神聖ローマ皇帝を継いだハプスブルク家のカール 5 世は、母方を継いで同時にスペイン王でもあった。ネーデルラントで生まれ、その領主でもある。絶頂期のスペインを統治する一方で、神聖ローマ皇帝と

して、フランス王とイタリアの支配権を争うなど忙しい生涯であった。その子フェリペ 2 世が相続すると、ネーデルラントで騒動が始まった。すでに話したように、経済の中心になりつつあったそこには新教が広まっていた。新たな課税をこぼむなど王と対立し、王の方は新教徒を弾圧する。1560 年代、ついに反乱に発展した。ネーデルラントの北部は、日本でオランダと呼ぶが、1600 年過ぎに実質的に独立する。東インド会社をつくったオランダは、海外で、スペイン王がその王でもあったポルトガルを圧倒していく。

1500 年代のイングランド・ウェールズで、テューダ朝の 2 代目ヘンリー 8 世が、生まれながらの王としてふるまった。跡取り息子のなかったスペインの王女との離婚を、ローマ教皇に認めてもらおうとして仲たがいし、国教会をつくってみずからその首長になった。大法官に取りたてたトマス・モアに反対されて、処刑までしている。アイルランドの王を称して、その支配を図る。

1500 年代後半、エリザベス 1 世が位につく。女王になる前も継いでからも、王家では、親戚のスペイン・フランス・スコットランドとの複雑な人間ドラマが演じられた。ところが、この女王は独身のまま 50 年近く統治して、新興国として発展のいしずえを築いた。1588 年、攻めてきたスペインの“無敵艦隊”を破った。海上戦は、軍艦の大砲を使う戦いに変化する。1603 年エリザベス女王が死ぬと、ヘンリー 8 世の姉の子孫であるスコットランド王

がイングランド王を継いだ。ステュアート朝という。王は、イングランド・ウェールズ・スコットランドを領有することになった。アイルランド王としてその支配権ももつ。この国を日本でイギリスと呼ぶ。

フランスの旧教徒は、新教徒をユグノーと呼んで弾圧した。1560年代に、ユグノー戦争と呼ばれる内乱に発展する。戦争は40年くらい静まらない。ヴァロア王家のアンリ2世の妃は、フィレンツェのメディチ家の娘であった。夫が死ぬと3人の子が次々に王になるのだが、混乱の時代を摂政として政務をとり苦勞した。自分の娘を、王家の支族ブルボン家の跡取り息子アンリと結婚させる。婿(むこ)はユグノーの盟主である。その結婚式でパリに集まっていたユグノーの貴族たちと、新教徒の民衆まで、数千人が殺されるという事件が起きている。彼女の息子たちが死ぬと、王位継承権一位のブルボン家のアンリが、アンリ4世としてフランス王になった。ブルボン朝のはじまりである。旧教徒側の抵抗が根強く、アンリ4世はカトリックに改宗するという離れ業をやって、1594年やっと王権が安定する。まもなく、新教徒の信仰を認めるナントの勅令を出して、内戦は終わった。

イタリアは、ルネサンスを先導するほどだったけれど、一つの国にまとまっていなかったのも、フランスやスペインや神聖ローマ帝国の王たちの侵略にさらされた。独立を保ったのは、ローマ教皇領・ヴェネツィア・ジェノ

ヴァ・フィレンツェなどぐらい。経済の中心が北西ヨーロッパに移ると、イタリアは勢いを失っていく。

ドイツでは、カール 5 世の弟がオーストリアのハプスブルク家を継いで、神聖ローマ皇帝になり、ベーメン(今のチェコ)・ハンガリーなども領有した。新旧キリスト教の対立は、それぞれの側の諸侯の対立として尾を引いていた。1618 年ベーメンで反乱が起きると、統一されていないドイツの内乱に発展する。バルト海の新興国デンマークやスウェーデンが、北ドイツに侵入する。そして、フランスまで介入する。オランダ独立戦争もくすぶっていて、スペインとオランダも関係する、ヨーロッパ全体に及ぶ戦争だった。三十年戦争と呼ばれている。

1648 年、ドイツのヴェストファーレンで講和条約がむすばれて、戦争は終わった。ヨーロッパ諸国が参加する大きな外交の場で、新しい国際政治の幕開けとなった。ドイツは大きな被害を受けて、まったく領邦国家の集まりにすぎなくなった。オランダやスイスの独立が認められ、スペインの勢力が後退した。新しい国際関係の中で、諸国はいっそう、自国を防衛する安全保障が重要だと考えるようになる。互いに宣戦し講和する主権国家は、安全のための対外政策をとるのだが、かえって緊張を生み出す。それが常態となって続いていく。世界に広がって今もなお続いている、と言えるだろう。

B. オスマン朝の西アジア支配

オスマン朝

日本でトルコと呼ぶ地域にテュルク人が定着した話はすでにした。ここアナトリアは、古代からアジアとヨーロッパの国々が支配を争い、民族も宗教も異なるさまざまな系統の人々が住んできた。映像で人々の顔を見れば、そのことが推測できる。1300 年頃、トルコ(テュルク)人のオスマンという人物が、ボスポラス海峡に近いところに、小さな国を建ててオスマン朝が始まった。

イスラーム教徒(ムスリム)になった遊牧民的な人々の王朝だが、土地柄からトルコ人以外の雑多な出自の人々も加えて、国の拡大に乗り出す。第 4 回十字軍に一時的に国を奪われたビザンツ帝国は、帝国という名がふさわしくない小さな国になっていた。オスマン朝は、ビザンツ帝国の混乱をついて領土を切り取っていく。初めからヨーロッパに顔の向いた国だった。1350 年代から対岸のバルカン半島を征服していく。都にしたアドリアノーブル(エディルネ)は今もトルコ領だ。ヨーロッパ人を配下に加えていく。捕えたキリスト教徒をイスラーム教に改宗させて、歩兵の常備軍(イエニチェリ)をつくった。1400 年頃ティムールに敗けたが、やがて、ほぼもとの領土を回復する。オスマン朝は、今のトルコ・ブルガリア・ギリシアの大半を支配する大きな国になった。

1400 年代中頃スルタンになったメフメト 2 世は、ビザ

ンツ帝国の記念碑のように残っていた都(コンスタンティノープル)を手に入れることにした。軍艦が丘を越えたというびっくりする話があるけれど、省略しよう。1453年、姿を変えて永らえたローマ帝国がほろんだ。コンスタンティノープルがオスマン朝の都となって、イスタンブルと呼ばれるようになる。ハギア・ソフィア大聖堂はイスラーム教のモスクに改造された。スルタンの権力は絶対的になり、中央集権的な体制がつくられていく。イスラームの法制度が整えられる。各地に教育施設をつくり、イスラームの学問を学んだ者は、司法や教育などで重要な地位を得た。官僚は、とても風変わりな制度で養成される。主にバルカン半島の農家の少年たちを強制的に召し上げ、イスラーム教に改宗させて“調教”するのだ。知性的で宮廷に向いた者が官僚になる。体のがんじょうな者たちは軍隊に配属された。世襲的な門閥の成立を防ぐためとはいえ、特異な能力主義である。トルコ系以外の人間たちも高位に登れた。征服した地域共同体の宗教はそのまま認め、ある程度自治を許した。

オスマン帝国の西アジア支配

メフメト2世の時代に、アナトリアつまり今のトルコを統一し、バルカン半島ではルーマニアの南部とボスニアまで征服した。ほぼこの地域が、オスマン帝国の直轄領となる。封土として土地を割り当てられた軍人が、税を集めた。1500年代になると、オスマン朝は、帝国として国々を征服していく。まず、メソポタミアとシリアを

征服し、エジプトの 맘루크朝をほろぼす。新たに得た領土は、おおむねそれまであった社会を支配している首長を通して、間接的に支配した。それらの地域は貢納金を治めるのである。メッカとメディナのある紅海東岸の地域も保護下に置いた。オスマン帝国のスルタンは、イスラーム教の長としてカリフと称するようになる。

帝国は絶頂期を迎えて、スレイマン 1 世が登場する。大国の軍事力は、ヨーロッパにとって危険なほどである。バルカン半島の北にハンガリーを討って、大半の領土を奪う。1529 年には、オーストリアのウィーンを包囲した。神聖ローマ皇帝カール 5 世のハプスブルク家の本拠地だ。攻め落とせなかったが、軍楽隊がヨーロッパ人の胆を冷やした。イラン人の王朝からイラク南部を奪う。1530 年代、ギリシア西岸のプレヴェザの海戦で、スペイン・ヴェネツィア・ローマ教皇の連合艦隊を破った。地中海の制海権をにぎり、トルコ沖の島々を領土に加える。さらに遠く北アフリカの国々を支配下に入れた。その後も、オスマン帝国はなお膨張する勢いを保つ。ただし、1571 年のレパントの海戦では、前と同じ三国に負けている。

1600 年代、イランにあった国を征服できなかったけれど、西アジアとバルカン半島に領土を拡大した。オスマン帝国の勢力はまだとても大きく、威光を保つ。しかし、ヨーロッパを圧倒することはできない。オスマン帝国は、アナトリアとバルカン半島のかつてのビザンツ帝国の交易圏を受け継ぎ、さらに、東地中海・紅海からインド洋

に及ぶ広い交易を経済的な基盤にしている。ところが、ヨーロッパのところで話したように、主要な海上交易路は大西洋とインド洋に移った。資本主義の世界システムが動きだし、ヨーロッパ経済の影響を受けるようになった。オスマン帝国は最盛期を終えて変化していく。

火器を装備した歩兵常備軍の重要性が高まるにつれて、在地の騎士層の力は弱まり、常備軍のイエニチェリが土着化するようになる。封土を与えて徴税させるやり方に代えて、徴税権を売ることがおこなわれるようになった。土地と富をめぐる支配体制は変化しつつあった。

C. ムガル朝のインド支配

前史

1000年頃アフガニスタンの王朝がインドに侵入して以来、イスラーム教徒(ムスリム)が北部を支配することが始まった。イスラーム諸国に、奴隸的な身分の軍人(マムルーク)になる風習があったことは、すでに見てきた。

1200年頃、テュルク系のマムルーク出身で、将軍としてインドに派遣されていたムスリムが、自立してスルタンを称した。デリーに都を置き、インダス川からガンジス川までの北部の広い地域を支配する国になる。インドに基盤を置く王朝なので、ヒンドゥー教の寺院を破壊するような行動をやめ、在来社会と地域共同体を残して、

それを支配する政策に改めた。ほぼこの領域に、4代のムスリムの王朝が入れ替わった。こうして、北部インドにイスラーム教徒の支配する体制が定着する。それに対し、南部にはヒन्दゥー教の王国があった。いちばん南には、かなり大きな王国があった。そこへ、1500年頃、ポルトガル人が来たのである。ポルトガルは、いくつかの地点を拠点都市として占領する。西岸中央部のゴアは20世紀後半まで領有し続けたが、イギリスから独立したインドが武力で取り返した。おじいさんが少年の頃のこととて、覚えているよ。

ムガル朝

1526年、デリーのスルタンを倒す者が現われた。また、アフガニスタンから侵入してきたのだ。倒されたスルタンもアフガニスタン系だった。インドにやってきた今度のムスリムは、テュルク・モンゴル系の人物で、ティムールの子孫だった。モンゴルの血を引いていることから、ムガル帝国と呼ばれる。1500年代後半に安定して、税制や官僚制など支配の体制が整えられた。位階制度をつくり官僚や軍人を序列づけた。土地は、王朝領地と軍人や官僚の給料にあてる土地とに区別されたが、時代とともに、やはり中間層の取り分が増えて支配の構造が変化したらしい。1600年頃から帝国は勢いを増し、インド南部へ支配地を広げていく。1700年頃には、インド亜大陸の南端部を除いて、古代マウリヤ朝に匹敵する最大の領土を獲得する。

平和になったインドで文化が発展する。宮廷ではペルシア語が話され、イスラーム文化の影響が大きい。イランから細密画が入って来たのもこの頃のことだ。一時期都の置かれた場所に、タージ・マハルという西アジア様式の壮麗な建物がある。写真を見る機会があるだろう。都はまたデリーに移され、大きな城が築かれた。

帝国の多くの地域はヒンドゥー社会で、その地域を勢力下に置く王侯がいた。イスラーム教徒のスルタンは、それらの王侯を通して、諸地域を間接的に支配するのである。インド亜大陸では、地域社会まで一貫した支配が及ばず、地域性が残ることになる。しかし、地方の農村でも商品の生産がさかんになり、全国的な商業活動が発展した。インドにもヨーロッパ人たちが銀をもちこみ、経済に大きな影響を与えたが、帝国の支配者は、土地からあがる租税の徴収に重きをおいた。やがて、各地方で農民を統率する領主層の力が強くなり、ムガル帝国の支配はゆるんでいく。

オスマン帝国もムガル帝国も、ヨーロッパがそれぞれの国を発展させている時代に、中世的なやり方で建国し、帝国として広い領域に支配を広げた。そこには、ヨーロッパ各国のような国のまとまりがない。以前は先進地域だった西アジアは、この時代になって科学や技術でヨーロッパに遅れをとるようになった。

6.2 中国の近世前期、琉球、日本の近世への移行

A. 中国の近世前期、明

明朝体(みんちょうたい)という言葉を知っているかい？ もとは一つの音節で一つの意味を表わしていた漢字は、秦の時代に統一されて小篆(しょうてん)という字体になった。今でも印鑑に使われる。それが漢の時代に整形されて、隸書(れいしょ)になった。そして筆で紙に書くうちに、楷書(かいしょ)・行書・草書の三つの字体が生まれる。今、君たちが習う漢字は楷書で、その字体を印刷物で見ると、みな似ている。宋の時代に活字が発明されて以来かたまってきて、明の時代に標準の活字体ができたのだ。それが明朝体だ。これから、その明の歴史を考えていこう。

明の成立

中国の農村は、元朝の支配下で沈滞していた。農民の負担は重く、外来の支配者に対する不満があった。1300年代初めフビライを継いだ孫が死ぬと、権力争いが続いたが、民衆の暮らしにかかわる問題は置き去りにされていた。1348年反乱が起きたら、元はその討伐に失敗する。元朝の軍事体制が必ずしも強くないことが分かって、反乱は全国に広がる。中でも、浄土教から変化した白蓮教という宗教結社が反乱勢力を引きつけ、いろいろな集団がその勢力に加わった。彼らは頭に目じるしの紅い布をつけたので、紅巾(こうきん)の乱という。また動乱の世になって、競争者や敵対者のあいだの勝ちぬき戦になる。

貧農の出身で朱元璋(しゅげんしょう)という人物が、紅巾軍の武将の後継者になった。今の南京を占領して根拠地にする。西と東にあった強敵を倒すと、1368年、明という国を建て、皇帝を名のった。元号を洪武とし、自分の一代をその年号で通すことに決めた。「一世一元の制」である。日本も明治維新のときその制度を採用する。それまでは、めでたいことやよくないことがあるとしばしば年号を変えていたのだ。朱元璋は、明王朝の太祖とされたが、年号を使って洪武帝と呼ぶのが一般的である。現代の日本の天皇の呼び方もそのやり方だ。

洪武帝は討伐軍を北へ派遣する。元軍は守りきれず、北伐軍が大都(北京)に迫ると、元の皇帝は中国を捨ててモンゴルへ逃げた。残っていた地方を平定して、1371年、明は中国を統一する。ほどなく雲南省も征服する。洪武帝は、宰相を置かず、皇帝独裁政治をおこなった。悪名を高くしたのは、万で数えるほど多くの宮廷人や知識人を殺したことだ。権力の安定を意図したものらしいけれど、専制体制の悲惨は目をおおうほど。

洪武帝の王朝を強くするもう一つの方策は、二十数人の皇子たちを各地の王として配置するものだった。しかし洪武帝を継いだ孫の朝廷は、この体制を変えようとし、ついに衝突が起きる。結局、モンゴルを防ぐために北京に配置されていた洪武帝の子の朱棣(しゅてい)が、二代皇帝を倒して帝位を奪った。永楽帝という。やがて北京が明の首都になる。それは現代中国まで続いている。

明にとって、北のモンゴルは国の安全をおびやかす大敵である。1402年に即位した永楽帝は、みずから五度もモンゴル遠征に出た。東北では女真族を討ち、黒竜江まで支配を広げた。ヴェトナム北部を支配下に置いたが、こちらは次の代に独立して朝貢国になる。そこでは漢字を使用し、国名は大越である。明の成立は、元に支配されていた朝鮮半島の高麗もゆさぶった。明が国境の北側に来たとき、高麗の武将の李成桂が、明との対立を避ける政策を主張し、クー・デターを起こして権力をにぎった。1392年、王に登る。国名を朝鮮という。明の成立は東アジア諸国の体制を変えたのである。

明の政治と社会

洪武帝は、行政部門を統括していた中書省を廃止して、その下の六つの部門を皇帝の直属にした。宰相がいなくなったのだけれど、永楽帝のとき、内閣大学士が政務を処理するようになる。日本で今も使う内閣という言葉はここから来ている。行政部門と別に、軍事と司法部門がある。地方は、「布政使」が受けもつ行政地域の省に分けられた。今の中国にまでひき継がれている。官僚は、科挙の試験で選ばれた。明代には、地方での「郷試」の合格者に官僚になる道が開かれた。科挙の合格者である「進士」は高級官僚になる。しかし、皇帝は宦官を用いたので、政治がゆがめられることになる。また、役人の給料は高くなく、わいろなど不正の原因になった。

全国を統一した洪武帝は、土地台帳と戸籍・租税台帳

をつくらせて、税収を確保しようとした。租税は、唐代以来変化しながら受け継がれたやり方で徴収した。初め生産物で徴収したけれど、中ごろからは銀で納めることが一般化する。農民に課す労働も、しだいに銀納に替わった。兵士を出す家は、軍戸として普通の民戸と区別し、屯田によって自給自足させようとしたが、あまり成功しなかったようだ。明朝は、伝統的な土地支配体制にもどろうとし、農業中心の古い政策を実施したのだ。儒教を大切にすることになる。朱子学を公認の学問とした。中期以降は、兵士を募集して集め、財政負担になる。

洪武帝は、海禁政策をとった。海外との交易を朝廷が管理し、私的に海外に出ることを禁じるのだ。その枠内で、永楽帝は、重用する鄭和(ていわ)を海外に派遣した。その規模がすごい。60 隻あまりの船団に、乗員総数 2 万数千人。最大の船の長さはおよそ 120m。鄭和は大船団をひきいて、マラッカ海峡を通り、スリランカ、南インドの西岸まで達する。さらに、ペルシア湾入り口、アラビア半島の南岸まで行った。5 回目には、アフリカの東海岸に達し、アフリカの動物たちを連れ帰った。1400 年代初期の 30 年間に、前後 7 回の大航海。ポルトガル人がインド洋に来るよりもずっと前のことである。東南アジアから朝貢に来るようになったが、大航海は朝廷の経済的な負担が大きすぎた。明は再び海禁政策にもどる。中国の大航海時代はそれ以上試されない。南シナ海に面した広州だけが海外に開かれた港であった。

明の社会と経済

明代、宋代の士大夫に当たる階層は郷紳である。科擧の試験で官僚になるのは地主層だったが、そういう官僚を出す地主一族が大きな発言力をもった。中には一族から成功した商人も現われる。こういう地主たちが一つの階層となって、地域社会で勢力を張った。これが郷紳である。ただ、科擧に合格するのはむづかしく、個々の地主が何代もその経済力を保つことも容易でない。力をもつ郷紳の家は入れ替わることが多かった。

農民には自作農と小作農があった。初期の租税を重んじる政策は、自作農を育成するものだったが、しだいに土地の集中が起きて小作農が増した。ただし、農業経営は大規模な経営が少なく、多くの小作農に貸して耕作させた。雇われる労働者もあったようだ。

各地で、茶や綿のような商品作物の栽培が活発になった。綿は、木綿(もめん)の布を生産する手工業の発展とむすびついている。長江下流域で発展し、農村での副業的な生産に加えて、専門的に綿織物を生産する者が出る。都市では規模の大きい業者もあり、はたおりをする雇用労働者がいた。長江下流域の諸都市では、絹織物の生産もさかんであった。

明といえば、陶磁器の生産を忘れてはいけない。代表的な生産地の景德鎮は名高い。政府の直営する窯(かま)で大量に生産された。宋代の簡潔な美から、染付(そめつけ)や赤絵など華やかな作風に変わった。鄭和の大航海で刺

激された海外交易での重要な輸出品であった。この交易圏は、東南アジア諸国と琉球・日本・朝鮮に及んだ。鄭和の行ったマラッカはその中心的な貿易都市で、そこからインド洋への交易が開けている。1500年代になると、ポルトガルとスペインが参加する。ポルトガル人は、明の管理貿易の下で、広州の入口マカオに居住を許された。1600年代にはオランダ人も来る。西洋にない品質の中国の陶磁器は、オスマン帝国やヨーロッパに輸出された。逆に、中国にアメリカ大陸の農産物が持ちこまれ、栽培されることが始まる。日本にも持ちこまれる。

明では、元にならって紙幣が発行されたが流通しなかった。銅銭もつくられたが、経済の循環を支えるものにはならず、永楽通宝などの銅銭は日本に輸出された。貨幣として銀が流通するようになる。ただし銀貨を発行せず、銀の重さを測って使用した。税を銀で納めることが始まる。役人や軍人の給料も銀で支給される。1500年代中頃から、南米から太平洋を越えて運ばれる銀が中国に入ってきた。同じ頃日本の石見銀山の銀も流入し始めた。銀の増加と並行して、流通経済が発展する。商業がさかんになり、各地の商品が国中に流通した。

明の文化

永楽帝のとき、南宋の朱熹(朱子)の編集した「四書」と「五経」の注釈書が刊行された。科学の試験の基準とされたので、朱子学は明代の学習者の教科書になった。これに対して、1500年代に王守仁(陽明)が現われて、人間の

心に中心点を移して「心即理」を唱え、朱子学を批判的に修正した。陽明学と呼ばれる。また、永楽帝のとき、過去の文献を整理して出版することがおこなわれた。

葉や農政や産業技術の知識を集大成した書物の名も、教科書にのっているはずだ。君たちは読むこともないだろうから、書名は省こう。知っていてよいのは、明代の中国が実用的な産業と技術では進んでいたこと。実学が重んじられ、多くの実用書が刊行されたのだ。ヨーロッパの科学と技術の知識も伝わった。伝えたのはイエズス会などのキリスト教伝道師だ。1500年代後半、マテオ・リッチという人が世界地図をもたらし、地球の丸いことが東アジア人に知られた。ユークリッド幾何学やヨーロッパの暦なども伝えられた。ただし、明の代数学は遅れていなかったそうだ。ヨーロッパ式の大砲の鑄造法が逆輸入され、実戦に使用された。

また、小説や戯曲が印刷されて、大衆文化が花開く。前代から物語としてあった『三国志演義』・『西遊記』・『水滸伝』が書物の形になった。四番目の奇書『金瓶梅』が出た。これらの小説は口語で書かれ、大衆に受け入れられる。印刷された本にさし絵もあった。戯曲のことをおじいさんは知らない。美術のことも省略しよう、明の美術品はしきりに日本に輸入されたのだけれど。

明の衰退と滅亡

明代を通じ、北のモンゴルとの緊張関係はなくならない。1400年代中頃、皇帝がモンゴル軍に捕らえられる事

件が起きている。明は万里の長城を修築して防衛につとめた。今残されている長城はこの時代のものだ。1500年代にも侵入をくり返した。海岸部では、日本との公認の交易がおこなわれるようになると、室町幕府のとりしまりによって、九州人の海賊行為(倭寇、わこう)は下火になった。ところが、明の経済の膨張は、管理貿易におさまりきらない活動を中国沿岸部にひき起こした。密貿易のとりしまりに対し、海賊的な行為に出る中国人が現われた。彼らは、九州人と組んで沿岸部に横行した。これを後期倭寇と呼ぶ。中国人中心の“倭寇”である。中国人のリーダーが、五島列島や平戸に住んで、多くの手下をひきつれて活動した。こうして北と南での「北虜南倭」は、明朝を悩まし、その支配を動揺させた。

ヨーロッパ人まで登場するようになって、明朝は行政の改革などを実施する。1500年代の明は、まだ危機的という状態にまでは至っていなかった。

しかし1500年代末、朝鮮へ日本の遠征軍が来たので、援軍を送って戦争をした。そして国内で反乱が起きた。行政改革の成果も消えて、財政難におちいる。政争も起きて効果のある対策は実施できなかった。おりから1610年代に、東北部で女真(満州)族が自立して後金を建てる。明はこれを討てず、東北部から後退することになる。ついでながら、台湾はまだ国を建てるほどの状態になく、明の統治に入っていなかった。オランダが東シナ海に現われると、1620年代に台湾を占領した。

やがて明は混乱した状態になり、1620 年代末、陝西省をはじめ各地で反乱が起きた。反乱を平定することができずに、王朝の困難が続く。1630 年代、東北の後金は、まだモンゴルに続いていた元の皇帝の位を継承して、国の名を清に変更した。朝鮮も清に従属するようになる。清は、明の北で大きな領土を支配する帝国となった。国内の反乱軍では、李自成という男が頭角を現わして、しだいに勢力を広げていく。1640 年代、昔の中国の中心部を支配下におさめると、王を称して年号を定め、国を成す勢いになった。1644 年、李自成は北京へ攻め上る。最期の混乱のとき、明の第 17 代皇帝のそばに駆けつけた忠臣はいない。皇帝は首をくくって、明王朝はほろんだ。李自成は、民衆や官兵に迎えられて北京に入城したという。今や中国の新しい皇帝になろうとしている。

B. 琉球

日本列島の南西につらなる奄美・沖縄・先島諸島は、琉球(りゅうきゅう)列島と呼べるだろう。そこに住む人々の話す琉球語は、日本語と区別するとしても、同系統の言語と考えられている。遺伝的な比較によれば、大陸よりも日本列島の人々に近いことが知られている。12世紀までに米や麦が栽培されるようになって、各地に首長が登場するようになったらしい。1300年代、沖縄本島に三つの国ができて、明が成立すると朝貢した。どこにあったか不明だけど琉球という名が中国の史書に出ていたが、このときから今の沖縄が琉球ということになった。

1400年代に、首里城を拠点とする中部の国が琉球を統一して、琉球王国ができた。明との朝貢貿易をさかんにおこない、その交易をさらに日本・朝鮮・東南アジアへ広げ、それぞれの地域の特産品を運んだ。この中継貿易で琉球はおおいに栄えた。1400年代中頃首里城に置かれた「万国津梁(しんりょう)」と刻んだ鐘が、諸国をつないでいるという自信を示している。その鐘は今も残っている。まもなく王朝が交代したが、今度も王の姓は尚(しょう)である。以後この王朝が琉球を支配する。行政組織を整え、奄美・先島諸島まで行政単位を置いた。位階制度も定めた。政治体制がかたまり、琉球は繁栄をつづける。

言葉の上からも、古い時代から日本との交流があったと考えられる。1500年代から歌謡集『おもろさうし(草紙)』が編集されて、漢字のすこし混じるひらがなで書かれて

いる。貿易船の行き来は、日本に琉球の存在を周知させる。豊臣秀吉は、朝鮮遠征のとき、琉球に軍船の派遣を求めたそうだ。琉球にとっての不幸は、日本が戦国時代を終えて、海外に関心をもつ時期が来たことである。

江戸に幕府が開かれて日本の幕藩体制が成立したのち、1609年、鹿児島藩の兵約3000が琉球に侵攻した。奄美諸島を藩の領地にし、沖縄・先島諸島を以後も支配することになる。しかし、琉球は王国として残された。鹿児島藩は、監督する役所を置いて間接的に支配し、年貢をとった。日本式の石高は12万石だったという。鹿児島藩は、琉球王朝に、それまで通り中国への朝貢貿易をさせる。海外貿易の利益がねらいだった。以前のように、琉球と中国のあいだに外交使節が行き来した。中国文化の影響が濃い。また、琉球の使節は、徳川将軍と琉球王の交代があったとき、江戸城に行った。

沖縄料理には昆布を使ったものが多い。北の昆布がどうやって琉球に来たのだろうか。戦国時代に、本州から日本人が北海道に移り住み、アイヌの人々と交易していた。幕藩体制になると、北海道南端の松前藩がアイヌとの交易を管理する。ところで江戸時代、北から日本海まわりで大阪に向かう海上交通路が主要な交易路だった。北海道などの昆布もこのルートで大阪に運ばれ、さらに琉球に大量に送られた。中国への輸出品の一つだったのだ。沖縄の昆布料理は、日本の支配が北海道と琉球列島へ広がっていった歴史をしみこませている。

C. 日本の近世への移行

戦国時代

テレビドラマの木下藤吉郎は、貧しい農民の子として登場するけれど、映像は戦国時代を正しく伝えない。父と継父が足軽だったとすると、たぶん武器を持って戦争に参加する上層農民だったろう。蜂須賀小六は野武士だったという話もまどわせる。野武士と聞いて、映画「七人の侍」を思い浮かべてはいけない。武将との主従関係のない在地の準武士層だろう。農村地域には、いつも戦いに動員される系列からははずれているが、地侍や上層農民がいた。血縁の者や下人を何人もかかえて、大きな農業経営をおこなう者が多かった。自立した農民もいた。武装した彼らは、戦国時代、武将に従軍して兵になる者と農村にとどまる者に分かれていく。木下藤吉郎が豊臣秀吉になって実施した刀狩りは、そういう兵と農民の分離を確定させる政策だった。

室町時代の初めには、職権を利用して勢力を強めた守護が、国々で守護大名になった。その時代に集まってきて戦う「合戦」では、登場する武士たちの家は長く続き、在地での生き残りをかけた戦いとは違うようだ。しかし、戦争状態が続き、下が上に勝つ下克上(げこくじょう)の世になると、一国内での領地の争奪戦になっていく。勝ちぬき戦になって、没落したりほろびたりする武士が出る。代々の武士だけでなく、武装した地侍などまで巻きこん

で、うまく連合をつくり敵対者を圧倒するリーダーが現われる。そうして勝ち残った者が、戦国大名になった。戦国大名たちは、法律的な文書を制定して、規律をもって領国を支配しようとした。領国内の武士たちに対する支配力が強くなり、主従関係になっていく。

ひき続く戦争の中で、荘園の古い所有権は無視されて、戦国大名は、領国のすべての土地の領有権を自分のものにしていく。その領地の中から、臣従する者たちが知行地を分配されるか、給料をもらうのである。寺社や昔の所有権者は、戦国大名の恩恵によって一部の土地を分けってもらうにすぎない。戦国大名の軍勢に加わらない在地の地侍やそれに準ずる者たちは、年貢を納める農民身分にされていく。

下克上の代表者としてあげられる伊勢長氏(北条早雲)は、今川氏の領国に小さな領地をもらおうと、伊豆に進出して、名目的に関東の首長だった足利氏の分家をほろぼした。同じ頃京都で、家来である管領が足利將軍を交代させた。1490年代のことで、戦国時代のはじまりとする歴史家が多い。一つの国で支配を確立した戦国大名は、となりの国を征服しようとして、勝ちぬき戦は領域的に広がっていく。戦国時代の末期には、中国・四国・九州や北陸・関東・東北で、勝ちぬいた、あるいはそれに近い大名が現われた。そして、日本の中央で勝ちぬいていったのが織田信長だ。君たちのまわりに、戦国時代の物語をよく知っていて、話を聞かせてくれる人がいるだろう。

政治体制の再編、織田・豊臣政権

足利氏の支族の今川氏は、守護大名から戦国大名に発展し、静岡県と愛知県南部の三国を支配する大大名だった。1560年、今川氏は、中国の春秋時代の覇者のように、大軍をひきいて都に向かった。愛知県の北部には、軍勢の少ない織田信長がいた。若い軍略家は、分散した敵の本隊を急襲するという正しい作戦で勝つ。今川氏の人質だった愛知県南部の松平氏(徳川家康)と同盟をむすんで、北へ出ようとする。征服した岐阜に根拠地を移した彼は、天下統一の意志を示す「天下布武」の印を使い始める。

下克上が京都でまた起きた。13代足利将軍が家臣の家臣に殺され、別の14代将軍が立てられた。13代将軍の弟は、織田信長に援助を求めて来る。名分を得た織田氏は京都に上り、保護した人を15代足利将軍にすえた。だが、まだ敵は多く戦いに忙しい。やがて、将軍と対立するようになり、競争者たちが将軍側について織田氏を包囲する。織田側の困難な戦いは、強敵の武田信玄が死ぬ頃、形勢が変わる。1573年、織田信長は将軍を京都から追放し、足利幕府は消滅した。そして、もう一つの権威者の朝廷に、新しい年号を「天正」とつけさせる。

天正元年から、織田信長の征服戦争は進みだし、近畿地方と周辺の国を切り取っていく。名高い長篠の戦いはこの頃のことだ。多くの火縄銃が使われた。火縄銃はそれ以前から使われていたようだが、本格的に使うようになれば、戦術が変化し、城の構えが変わることになる。伝統ある延暦寺を焼き討ちしたり、人並みでない行動の

多い織田信長は、異端児と呼ばれたりするけれど、天下をねらう人物として、中国や日本の前例通りに官位を高めていった。近衛大将になって、征夷大將軍と同じく「上様」と呼ばれるようになる。長男は、鎮守府將軍になる直前の官職を得た。はっきりと政権を建てる方向に進んでいる。やがて、右大臣・正二位まで昇進する。1579年、安土に天守閣をもつ城が完成した。イエズス会の宣教師が、ヨーロッパの王城にくらべられると言ったほど豪華な城であった。ここで戦国時代が終わったとするのは、気が早いだろうか。

本州中央部を制圧した織田氏の財力はとても大きく、いくつもの軍団をつくれるほどの兵力をもつ。1582年、総勢10万を超す大軍が、鎌倉時代以前から山梨県にあって戦国大名となっていた武田氏をほろぼした。凱旋した織田信長に、天下統一の見通しがついた。四方で勝ちぬいた者に、担当する軍団が攻勢をかけようとしている。大敵の中国地方は、羽柴秀吉の軍団が攻めている。織田信長は、みずから中国征伐を進展させるために出発し、京都に行った。信長の中央軍の主力は、明智光秀のひきいる軍団である。

その明智光秀が、突然クー・デターを起こして、織田信長と長男を討ってしまう。明智氏は、京都での政治活動など織田政権で重要な役目をにっていた。クー・デターは権力を奪うことが目的だが、どういう構想だったのかよく分からないうちに(12日目に)失敗する。岡山県

で敵の城を囲んでいた羽柴秀吉が、機敏に京都に攻め寄せて、京都入口での会戦で明智光秀を討ったのだ。事態は織田政権の後継者争いになる。まだ対外戦争は続いていて、織田家が権力者になることはできなかった。結局、勢いのある羽柴秀吉が勝ちぬいていく。羽柴氏は、織田政権下にあった諸大名に対し、競争者を従え、敵対者を倒し、支配権を確立した。1583年、安土城よりも豪壮な大阪城を築き始める。羽柴秀吉は官位を高め、政権の形を整えていく。権力を執行する関白の位に進み、1586年には豊臣の姓をもらって太政大臣になった。豊臣政権の成立である。豊臣秀吉は、天下を統一するのに、織田信長のように敵をほろぼすやり方をとらず、敵対者を服属させていく。例外は、関東を支配する北条氏をほろぼしたぐらい。豊臣政権下には大大名が多く残って、支配力は完全とは言えなかった。

日本が統一されると、膨張した軍事力は相当のものに見えた。豊臣秀吉は、明を討つという誇大妄想にとりつかれて、1592年朝鮮半島へ出兵する。だが、李氏朝鮮は明の援軍を得て日本軍をくじき、二度の外征は失敗した。問題をかかえた政権を残して、1598年秀吉は死ぬ。

近世への移行

戦国時代と聞くと、社会の混乱と思うかもしれないけれど、日本の経済は発展した。人口推計は、1500年からの100年間にかなり増えたとしている。戦国大名は、領国の繁栄のために、田畑の開発や治水に力をそそぐ。石

見銀山のような金銀の鉱山も開発された。1500年代中頃、火縄銃が日本にもたらされるとすぐに複製できて、各地で大量に生産されるようになったことも見過ごしてはならない。それは、当時の日本の手工業の水準がかなりのものだったことを証言している。日本の火縄銃は、東アジアで性能のよいものだった。朝鮮と明の軍勢は、日本軍の火縄銃に苦しんだ。火縄銃や武器などの鉄製品の生産地が栄えた。商業も発展した。戦国時代の戦争は、一国を越えて物資を集めたり運送したりする事業を発展させただろう。

上層の武士よりも下位にある人々が力を増して、支配体制に反抗する一揆となって現われた。真宗門徒の一向一揆が諸国で起きたし、大阪の本願寺の勢力は織田政権と対決するほどの力があつた。織田信長も、徳川家康も、その大衆の力をおさえこむことによって支配を確立した。堺に代表される都市が各地に発展し、職人と商人の町衆も力をつけつつあつた。千利休が独自の茶道を開拓した例にみられるように、ここには市民が育つチャンスがあつたのかもしれない。しかし、それらの町衆も戦国大名が武力で圧倒して、支配下に置いてしまう。

豊臣政権の実施した大名支配と検地・刀狩りは、進行中の政治体制と社会構造の変化を完成するものだった。検地は、土地を測量して面積を台帳に記録する。各地方の農産物の生産高がみつもられ、米を基準に石高で表現される。それを基に、支配に従う大名と朝廷・公家に、

各地方を知行地として割り当てる。領主は、検地帳をもとに年貢を取りたてるのである。そして、豊臣氏と大名の家来は、大身の侍だと知行地をもらい、それ以下の侍と使用人は集めた米を支給される。中世のように複数の者で、取り分を奪い合うことはない。土地支配は一元化されたのである。検地は、土地ごとに年貢を負担する農民を確定する作業でもあった。確実に年貢を取りたてるために、土地の所有権のはっきりしている者や実際に耕作している者を指定した。血縁の者や下人を何人もかかえている大きな土地所有者も認定されたけれど、実際の耕作者に年貢を納めさせるという政策は、多くの自作農をつくりだすことになる。農家は、夫婦と子供と父母からなる小家族を基本とするようになっていく。

武士身分になった者は土地から離れ、たいいてい城下町に住むようになった。大名と武士は、取りたてた年貢を売って、必要なものを手に入れなければならない。土地と耕作者を支配して農産物を得る体制は、他方で物資の流通を必要とするのである。城下町には、職人や商人がいなければならない。豊臣政権は金貨(大判)を発行した。大阪は、日本中の物資の集まる中心地として歩み始める。

織田・豊臣政権時代の文化は、支配者の好みに影響された。豪華な建築が建てられ、その装飾はきらびやかなものだった。安土城や大阪城は、ふんだんに金箔を使って内装された。建物の壁やふすまに絵が描かれ、狩野永徳などが、時代にふさわしく大胆で力強い絵を描いた。

「洛中洛外図」など、当時の風俗を教えてくれる。水墨画を消化してすぐれた作品を描いた長谷川等伯も現われた。戦国時代の築城は、土木・建築の技術の向上を示しているだろう。室町時代以来の生活文化の変化は続き、書院造が発展し、畳を敷くことが広まる。住宅も着物も、江戸時代の時代劇で見るような方向へ進んでいる。

海外からの来訪者が増えて、海外文化への日本人の敏感さはこの時代にも見られる。きんらん・どんすのような織物は、中国から伝わったのだ。南蛮人つまりヨーロッパ人を描いた絵は、異国への興味を物語っている。パンやタバコなどのポルトガル語が今も残っているね。イエズス会などの宣教師がキリスト教を広めた。キリスト教の受け入れは、日本人を知るうえで重要な出来事だ。大名にもキリスト教徒になった者が出て、九州から四人の少年使節がローマに派遣された。のちにキリスト教が禁止されると、刑死した者が出て、九州に隠れキリシタンが残った。

江戸幕府の成立、幕藩体制

豊臣秀吉の死は豊臣政権を不安定にした。あとを委任された五人の大老の中で、関東 240 万石の徳川家康の力が飛びぬけている。政局は危機に至り、豊臣政権の存続をかけた戦いになった。1600 年、徳川家康が、関が原での天下分け目の戦いに勝利して、実権をにぎる。

1603 年、徳川家康は、征夷大將軍になって江戸に幕府を開いた。幕府は、豊臣政権でできていた制度を修正し

ていく。制度の整備にはもちろん年月がかかったけれど、完成した幕府と諸藩で全国を支配する体制は、封建体制の行きついた一つの極限であった。封建制でありながら中央集権的で、土地と農民の支配はとても効率的だ。

初期のうちに、豊臣家をほろぼし、前政権につながりの深かった大名家などの知行地を取り上げた。徳川家の直轄領は豊臣家よりもはるかに大きく、すべての大名を圧倒する。幕府は、公的な権力を行使する中央政府であり、公儀と呼ばれて大名に領地を割り当てる権限をもつ。大名は、藩と呼ばれる地方政権としてその領地を支配するのだが、別の土地へ移されることもあった。藩は領地を公儀からあずかるのである。大名の妻子は江戸に住み、藩主は一年おきに江戸に参勤しなければならない。大名が反乱を起こすことはむづかしい。

朝廷は残されたけれど、江戸幕府は以前の幕府よりも君主的な権限をもった。日本との戦争のあと、朝鮮は、将軍の代替わりごとに使節を日本に送るようになって、来るのは江戸城だ。琉球の使節も江戸城に来る。幕府が海外貿易を管理し、オランダの東インド会社代表も江戸に来る。将軍は、外交文書で「大君」と称した。外交権をもつ中央政府といえる。朝廷は、形式的な権威だけを保って、年号を決め、将軍に位階と将軍職を与えて支配の正統性を保証する。公儀の頂点にある将軍は、諸大名や旗本に武家のための位階と官職名を与え、序列づけて支配する。たとえば「忠臣蔵」に出る吉良氏は、従四位上・左近衛権少将・上野介だ。

朝鮮遠征のために、全国の大名が九州に集められたとき、九州は海外交易がさかんで、多くのヨーロッパ人が来ていた。大名たちの関心を海外に向けたに違いない。やがて東北の伊達正宗は、スペインの指導を受けてヨーロッパ式の大型帆船を建造した。ここにも当時の日本の技術力を見ることができる。伊達氏の使節、支倉(はせくら)常長は、その船で太平洋を渡り、スペインとローマへ行っている。徳川家康は、オランダ船に乗って漂着したイギリス人を、外交顧問として召しかかえた。旧教のスペイン・ポルトガルと新教のオランダ・イギリスの競争を知っていたのだ。かなりの日本人が東南アジアに渡り、タイには日本人町まであった。日本が大航海に参加するチャンスがなかったわけではない。しかし日本は、国内の安定を求めて、明のように海禁政策に進む。

1630年代に、九州のキリスト教徒を弾圧する島原の乱が起きている。この前後に、幕府はいわゆる鎖国令を出す。日本人の海外への渡航は禁止される。長崎で、オランダとだけ幕府の管理する貿易をおこなった。長崎には中国商人が来たし、朝鮮との交易は対馬藩が担当した。朝鮮には対馬藩の出先の役所もあった。琉球も入れれば、鎖国という言葉は実態を見失わせるかもしれない。

こうして日本は、日本なりの体制を整えて、近世を歩んでいく。それがどういう時代になったか、続きは次の章で話そう。